

Tattvacintāmaṇi における *pramāṇa-śabda* の意味

岩 崎 陽 一

はじめに

本稿では、新ニヤーヤの根本典籍ともいえる *Tattvacintāmaṇi* (=TC) において、著者ガンゲーシャ (Gaṅgeśa, 14C) が正しい認識の手段 (*pramāṇa*, 以下「プラマーナ」とみなす言明, すなわち “*pramāṇa-śabda*” とは何を意味するのか——それは真実を述べる言葉なのか, 信頼できる言葉なのか——という問題を検討する。

この検討において、ガンゲーシャの認識論の解釈に関するふたつの論争に注目する。いずれも TC 第 1 部第 2 章「真理論」(*prāmāṇyavāda*) 章 (以下「I.2 章」) の翻訳研究をめぐって為されたものである。ひとつは 1980 年代に Mohanty と Potter の間で交わされた¹⁾。ニヤーヤにおける「正しい認識」(*pramā*) の「正しさ」(*prāmāṇya*) を、Mohanty は「真」(truth) と捉えるのに対し、Potter はプラグマティストの「実用性」(workability) に類するものとして理解すべきであると主張した。もうひとつは、Phillips, Tatacharya, Dasti の 3 者と Ganeri との間に近年展開されたものである²⁾。両陣営とも認識の正しさを「真」相当の性質と理解した上で、Phillips らはプラマーナを「叙実的」(factive) なものと捉えるのに対し、Ganeri は、それは「可謬的」(fallible) であると主張する。前者は、プラマーナに基づいて生じた認識は常に真であるとする立場、後者は、プラマーナから偽なる認識が生じる場合もあるとする立場と理解できる。後者の主な論拠は、プラマーナが正しい認識をもたらすには美点 (*guṇa*) の存在が要求される、ということにある。

上述の TC I.2 章および第 4 部第 1 章「言葉の正しさ」(*śabdaprāmāṇyavāda*) 章 (以下「IV.1 章」) には、*pramāṇa-śabda* に関するガンゲーシャの詳しい議論が見られる。そこでの記述を、上記の論争を踏まえて検討すると、第 1 部と第 4 部とで *pramāṇa-śabda* の意味するところが若干異なっていることに気付く。そしてその差異は、ガンゲーシャの認識論を考える上で重要な解釈の分岐をもたらす。以下でこの差異を明らかにし、ガンゲーシャの言語理論の多面性を提示したい。

“pramāṇa-śabda” の要件

ニヤーヤ学派の pramāṇa-śabda の定義としては、「信頼すべき者の教示が [pramāṇa-]śabda である」(NS 1.1.7: āptopadeśaḥ śabdaḥ.) というものがよく知られている。ガンゲーシャもこれに類する考えを TC IV.1 章の冒頭に示すが³⁾、話し手の性質に依存して言明の正しさを決定する方法は、I.2 章と IV.1 章において、ガンゲーシャ自身により批判される⁴⁾。まず I.2 章では、正しい言語理解をもたらす美点は何かという問題が検討され、話し手の知識は美点になり得ないと言われる⁵⁾。また IV.1 章では、言語理解に関する「正しい認識の原因」(pramā-prayojaka, “prāmāṇye prayojka”, “pramā-hetu” 等とも呼ばれる) は何かということが議論され、同じく、話し手の知識は不適格だと言われる⁶⁾。「正しい認識の原因」とは、「逸脱する言葉に存在せず、逸脱しない言葉に等しく存在し」、「それが存在しない言葉からは正しくない認識が生じる」ところのものであると言われている⁷⁾。これをめぐる議論は I.2 章での美点についての議論と平行関係にあり、美点に近い、或いは同一の概念であると考えられる。

ガンゲーシャは I.2 章で美点を、IV.1 章で「正しい認識の原因」を次のように規定する。IV.1 章では規定に揺れが見られる。

- (A) I.2 章 適合性等の存在、或いは対象に即したそれらの認識⁸⁾
- (B) IV.1 章
 1. 適合性等の認識⁹⁾
 2. 適合性の認識一般（疑念と確定的認識のいずれでも）¹⁰⁾
 3. 論理より生じる認識と文脈等のいずれか、及び期待と近接の確定的認識、及び適合性の認識一般（疑念、顛倒知、正しい認識のいずれでも）¹¹⁾

ガンゲーシャの認識論において、これらの付加条件が「正しい認識の手段」(pramā-karaṇa) としてのプラマーナにとって外的なもので、即ちプラマーナとは別に存在するものであることは、ガンゲーシャが言語理解の「手段」(karaṇa) と美点ないし「正しい認識の原因」を区別していることから推測できる¹²⁾。この「手段」のみを狭義のプラマーナとするならば、言語理解のプラマーナとは何か。ガンゲーシャはその定義を与えないが、それは、何ら限定を受けない「言葉」、或いは後代の新ニヤーヤで言われるような「語の聴覚認識」でしかないだろう。そして単なる「言葉」等を確実な認識手段と考えることには無理がある。そこには可謬性を認めるべきであろう。しかし、そのような単なる「言葉」をガンゲー

シャは決して pramāṇa-śabda とは呼ばない、ということに注意しなければならない。ガンゲーシャは、上記の付加条件を満たす言明のみをプラマーナと呼ぶ¹³⁾。また、付加条件には、プラマーナでない言明には存在しないものが設定されているので、付加条件の充足は、或る言明が pramāṇa-śabda であることを主張する論理的根拠にもなる。

適合性の認識

前掲した表から明らかなように、ガンゲーシャは正しい言語理解をもたらす美点ないし「正しい認識の原因」として適合性 (yogyatā) の役割を重視している。適合性とは、文意を構成する語意が他の特定の語意と結びつき得るという性質である。例えば「赤ワインは白い」という言明の表す命題において、赤ワインは白さと結びつき得ない。すなわち、この言明は適合性を欠いている。

TC I.2 章でのガンゲーシャは、或る言明が pramāṇa-śabda であるためには適合性等の存在、またはその対象に即した認識が必要であると言う。一方 IV.1 章では、適合性の認識は疑念 (saṃśaya) でもよい、さらには誤っていてもよいと述べる。それぞれの規定の意味するところを、或る日本人が「私は日本人です」と発言する場合を例にとって考えてみよう。なお、TC I.2 章と IV.1 章とで、「適合性」の意味合いが若干揺れているように思われる。註釈者マトゥラーナタは、I.2 章への註ではそれを「片方の語意における、他方の語意との結びつきの基体としての性質」と言い換えている¹⁴⁾。一方、IV.1 章では、ガンゲーシャ自身が適合性を「阻害するプラマーナの非存在」(bādhaka-pramāṇa-abhāva) と定義している¹⁵⁾。本節ではマトゥラーナタの理解に従って解釈を行う。

- (1) 適合性の存在が pramāṇa-śabda の要件であるとする場合、聞き手がこの人物について何ひとつ情報をもっていなかったとしても、この発言は pramāṇa-śabda であることになる。pramāṇa-śabda は「真なる命題を述べる言明」と一致する。
- (2) 適合性の対象に即した認識が要件であるとする場合、聞き手は、この人物が日本人であることを知っていないと、この発言は pramāṇa-śabda とは見なされない。ただし、ここでは適合性の認識が「対象に即している」(yathārtha) ことが求められているだけであり、それが確かな根拠に基づくことは要求されていない。「この人は恐らく日本人だろう」という推測であっても、それが事実と一致するのならば、この発言は pramāṇa-śabda であることになる。
- (3) 適合性の疑念もまた pramāṇa-śabda を成り立たせるとするならば、「この人

が日本人でない証拠 (bādhaka-pramāṇa) は、ないかもしれない、あるかもしれない」と決めかねている状態でも、先の発言は pramāṇa-śabda となる。さらに、顛倒知 (誤った確定的認識) までも許容するならば、話し手が実は日本人でないのに、聞き手が「この人は日本人に違いない」と勘違いしているとき、「私は日本人である」という偽りの言明も pramāṇa-śabda となる。

上記 (3) の帰結は受け入れがたい。正しい認識をもたらさない、偽りの言明は、pramāṇa-śabda に含められるべきではないだろう。

“pramāṇa-śabda” の二側面

結論に代えて、前節で示した問題を解決するための試案を 2 案示す。

適合性の顛倒知を言語理解の原因として認める (3) の見解は、1 箇所 (前掲表の (B) 3) のみで示される。この箇所は、「適合性の認識一般」を、「正しい認識の原因」としてではなく、正誤に関わらない言語理解一般の原因として規定していると読解することもできると思われる。一方、適合性の疑念が「正しい認識の原因」として認められている箇所 (前掲表の (B) 2) については、それが正しい認識の必要十分条件ではなく、必要条件のひとつとされていると考えれば説明がつく。いずれの箇所も IV.1 章の中にあるが、この章は、認識論的問題に焦点を当てる I.2 章と異なり、言語理解の発生条件という、ひとの認知や心理に関わる問題に関心を向けている。この文脈の特性は、上記の解釈を指示するひとつの要因となろう。ただし、そのような必要条件は誤った言葉についても存在し得るため、「正しい認識の原因」の定義に反し、また pramāṇa-śabda を叙実的とする解釈も成り立たなくなる。

もうひとつの試案は、IV.1 章での「正しい認識」の「正しさ」を、「真」相当の概念ではなく、Potter の言うような実用的性質、例えば有効な行為発動を引き起こすことと考えるものである。適合性の疑念や顛倒知からも、文意理解とそれに応じた行為発動は生じる。Potter による実用性解釈は、確かに、I.2 章の真理論については支持しがたい。しかし、IV.1 章についてはそれを妨げるものは見当たらない。筆者は、実用性解釈を強く支持するまでの根拠を得てはいないが、それに対する批判を再検討する余地はあると考えている。

上記のいずれかが適当であるとするならば、pramāṇa-śabda を確実に真なる認識をもたらす言明とする理解は、IV.1 章では成り立たなくなる。しかし、上記は I.2 章についてのそのような理解を否定するものではない。むしろ、I.2 章の pramāṇa-

śabda に可謬性や実用性を読み込むのは困難と思われる。ふたつの章では pramāṇa-śabda の意味が異なっているか、或いはひとつの概念の異なる側面が照らし出されていると考えるべきであろう。

- 1) Cf. Jitendranath Mohanty, *Gaṅgeśa's Theory of Truth*, second revised edition (Delhi: Motilal Banarsidass, 1989; first edition, Santiniketan, 1966); Karl H. Potter, "Does Indian Epistemology Concern Justified True Belief?," *Journal of Indian Philosophy* 12 (1984): 307–327; Jitendranath Mohanty, "Pramāṇya and Workability," *Journal of Indian Philosophy* 12 (1984): 329–338; Karl H. Potter and Sibajiban Bhattacharyya, eds., *Indian Philosophical Analysis: Nyāya-Vaiśeṣika from Gaṅgeśa to Raghunātha Śiromaṇi*, Encyclopedia of Indian Philosophies, vol. 6 (Delhi: Motilal Banarsidass, 1993). 2) Cf. Jonardon Ganeri, review of *Epistemology of Perception: Gaṅgeśa's Tattvacintāmaṇi, Jewel of Reflection on the Truth (About Epistemology): The Perception Chapter (Pratyakṣa-khaṇḍa)*, by Stephen H. Phillips and N. S. Ramanuja Tatacharya, *Journal of the American Oriental Society* 127, no. 3 (2007): 349–354; Matthew Dasti and Stephen H. Phillips, "Pramāṇa Are Factive—A Response to Jonardon Ganeri," *Philosophy East & West* 60, no. 4 (2010): 535–540; Jonardon Ganeri, "The Study of Indian Epistemology: Questions of Method—A Reply to Matthew Dasti and Stephen H. Phillips," *Philosophy East & West* 60, no. 4 (2010): 541–550. 3) *TC* IV-1, p. 1, 4–5: prayogahetubhūtārthatattvajñānanyah śabdaḥ pramāṇam. 4) 本節の内容については拙稿「Tattvacintāmaṇi における言葉の妥当性の根拠と確定方法」『インド哲学仏教学研究』17 (2010): 41–55 で詳述している。5) *TC* I, pp. 350, 3–351, 2. 6) *TC* IV-1, pp. 68, 1–69, 2. 7) *TC* IV-1, pp. 92, 4–93, 2. 8) 注 5 の箇所を参照。9) 注 6 の箇所を参照。10) *TC* IV-1, pp. 77, 3–79, 2. 11) *TC* IV-1, pp. 170, 1–173, 1. 12) 例えば注 6 の箇所。同様の表現は多数見つかる。13) 例えば *TC* I, pp. 351, 8–352, 5 を参照。14) *TCR* I, p. 350, 13–15. 15) 注 10 の箇所を参照。

〈テキストと略号〉

NS: Nyāyasūtras of Akṣapāda. In Walter Ruben, *Die Nyāyasūtra's*. Leipzig: Deutsche Morgenländische Gesellschaft, 1928. Reprint, Nendeln: Kraus Reprint, 1966. *TC*: *Tattvacintāmaṇi* of Gaṅgeśa. *Tattvacintāmaṇi of Gaṅgeśa Upādhyāya*. 4 vols. in 6. Edited by Kamakhyanath Tarkavagish. Calcutta: Asiatic Society, 1888–1901. Reprint, Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan, 1990. *TCR*: *Rahasya* of Mathurānātha, a commentary on the *TC*. See *TC*.

〈キーワード〉 新ニヤーヤ, ガンゲーシャ, śabda, pramāṇa

(東京大学大学院)